

機界の冊

轉持

神本しんほんに在りては則ちすなわ活立かつりつし、天神てんしんに在りては則ちすなわ機跡きせきす。宇宙うちゅうに在りては則ちすなわ通塞つうそくし、天地てんちに在りては則ちすなわ動止どうしす。徳とくに居り、道どうに行き、物ぶつに定まり、事に變へんし、轉てんに轉てんし、持じに持じし、華かに發はつし、液えきに收おさむ。往ゆくとして動靜どうせいに非あらざる莫なし。動靜どうせいは是れ機き、廻すなわち本根ほんこんの精せいなり。此この氣きは以て華液かえきを發收はつしゅうす。故ゆえに靜せいなる者は、其その精せい以て隠かくれ、動どうなる者は、其その麓そもつ以て見る。靜せいを以て、神しんに路ろし、物ぶつに宅たくす。已すでに能よく路宅ろたくを爲なす。故ゆえに物ぶつの露ろする、虛天實地きよてんじつち、皆みな其その中に在り。其その運轉うんてん升降しょうじょう、拗突おとつこうげ高下かうげ、芸芸うんげん擾擾じょうじょう、皆みな靜せいに由りて紀きす。是こゝを以て、動どうに非あらざれば見る可べからず。靜せいに非あらざれば位いす可べからず。故ゆえに、動どうなる者は止地しちを得て、變擾へんじょう以て紀きする有あり。靜せいなる者は動天どうてんを得て、蘊奧うんおう以て發はつする有あり。中ちゅうなる者は止しの宗そうなり。止しなる者は靜せいの位いに就つきて言いうの辭じなり。氣物きぶつは天地てんちを結むすびて、其その質しつは地に實じつし、其その氣きは轉てんに達たつす。故ゆえに天地てんちは動止どうしを分わかちて、止とどまる者は天てんを散さんじ地ちを結むすび、動どうなる者は天てんを轉てんじ地ちを持じす。轉中てんちゅうは以て運轉うんてん環守かんしゅし、持中じちゅうは以て噓喻こきゆう發收はつしゅうす。故ゆえに靜せいは則ち天てんの體たいなり。混淪こんりんの物ぶつの宅たくする有あり。動どうは則ち神しんの用ようなり。鬱滯うつぼつの氣きの活かつする有あり。故ゆえに塞そくする者は靜せいなり。天容てんいれ物居ぶつおり、動どうの跡せきを見みさず。通つうずる者は動どうなり。時率じひきい期き從したがい、靜せいの物ぶつを見みさず。止とどまる者は動うごかず。位立いたちて物居ぶつおり、形けい成なりて體立たいたつ。動どうなる者は止とどまらず。象しやう旋めぐりて歳さいを爲なし、質動しつどうきて運うんを爲なす。轉てんずる者は轉守てんしゅし、持じする者は持止じしし、發はつする者は鬱發うつはつし、收おさまる者は肅結しゆくけつす。剖ぼうに從したがいて機有きあり。蓋けだし體たいは天地てんちを成なし、性せいは天神てんしんを成なす。相あい得えて物ぶつの神しんを含ふくむや。塊塊おつおつに居り、衰せん衰せんに行く。塊塊おつおつは處しよを爲なし、衰せん衰せんは時じを爲なす。

塊塊おつおつは未いまだ方位ほういを見みず。象質しやうしつは動うごきて方位ほうい見みる。衰せん衰せんは未いまだ歲運さいうんを見みず。象質しやうしつ交まじわりて歲運さいうん成なる。塊塊おつおつは其その處しよなり。内外ないがいは散結さんけつを容いる。衰せん衰せんは其その時じなり。往來おうらいは歲運さいうんを成なす。散結さんけつは能よく塞ふさがり、往來おうらいは能よく通つうず。塞そくする者は以て居り、通つうずる者は以て行く。通つうじて行く者ものも亦また塞ふさりて住じゅうし、塞ふさりて居おる者ものも亦また通つうじて移うつる。居おる者もの

は其の體を常にし、行く者は其の體を移す。昨の天地は、今に收む可らず。以て住の移を觀る。今の事物は、昨に遺す所無し。以て移の住を觀る。是を以て通塞は精なりと雖も、亦た一動一靜の間なり。

時處は天なり。神物は物なり。天は能く物を容る。物は能く天に居る。是を以て天地は天神を用う。天神は天地に體す。是を以て、住して處を爲す者と雖も而も移り、逝きて通を爲す者と雖も而も住す。處容れて物居り、天有して神發す。時は通じて神は運す。是を以て處なる者は靜なり。物なる者は止なり。止る者は中を得て、而して止る。

運ぶ者は外を得て、而して居る。是に於て、處は塞して物は居り、時は通じて期は從う。常なる者は歳を以て成り、變する者は運を以て爲す。蓋し率いる者は衰衰なり。行く者は緩急を爲す。容るる者は塊塊なり。居る者は動止を爲す。緩急なる者は經の機なり。動止なる者は爲の機なり。經通は發收の物に由りて、而して歳運を成す。緯動は散結の物に從いて、而して轉持を成す。

神なる者は物を用いる者なり。物なる者は神に體する者なり。故に衰衰塊塊、氣は動き物は止る。一統べて二分る。故に各體は物を爲す。各神は事を用う。物は虚に非ざれば則ち實す。用は居るに非ざれば則ち行く。故に天地止は、居りて動く。神爲天成は、立ちて行く。故に運轉環守、哮喘發收なる者は、動止なり。歳運の消長、象行の盈縮なる者は、緩急なり。是を以て、體に居り氣に行く。以て事物成る。没露體用、往くとして然らざる無きなり。

大小の間は、則ち大は天地を以て動止す。大は天地を以つて動止し、小は天地に由りて動止す。天地を以つてする者は、行居 方位を露せず。天地に由る者は、行居 各方位に由る。蓋し物の没露は、體の虚實に由る。體は形に由りて成り、形は理に由りて成る。理なる者は氣の道路なり。形なる者は體の容貌なり。氣、運ばざれば則ち形成らず。形、見れざれば則ち物立たず。體は氣物性體、全偏大小を有す。性、異なれば則ち物も異なり。物異なれば則ち理も異なり。理異なれば則ち形も異なり。各氣は各理に隨う。各理は各物に成る。是を以て、天地は止を以て

則ち理も異なり。理異なれば則ち形も異なり。各氣は各理に隨う。各理は各物に成る。是を以て、天地は止を以て

主と爲す。圓は直を含む。轉持は動を以て主と爲す。矩は規を成す。靜に直圓と謂い、動に規矩と謂う。規に東西有り。氣は從いて運轉す。矩に南北有り。氣は從いて噓噓す。而して圓は内外を成し、氣は此に轉持す。直は上下を有し、氣は此に發收す。内外なる者は圓の位なり。上下なる者は直の位なり。

轉持なる者は氣なり。轉位は外を占め、持位は内を占む。天地なる者は體なり。天位は上を占め、地位は下を占む。天は圓を以て形と爲し、地は直を以て理と爲す。轉は規を以て形と爲し、持は矩を以て理と爲す。天なる者は動なり。地なる者は止なり。天は動を以て運轉し東西を分ち、地は止を以て環守し南北を分つ。故に天は運轉を以て動き、環守を以て止る。地は土石を以て止り、噓噓を以て動く。運轉は東西に在り。噓噓は南北に在り。天地は理を圓中の直に於て共にす。而して以て規矩を爲す。圓を以てして、而して氣は轉じて西に面し、象は運して東に面す。直を以てして、而して含は噓噓いて易は噓噓き、南北は代るがわる面す。是を以て天氣は南に噓噓え、則ち地氣は北に發して、而して其の用は半面に在り。而して其の間は則ち水燥の遊ぶ所なり。トより發して升り、上より結んで下る。蓋し地體なる者は止り、萬質は皆な親しんで此に著く。天氣なる者は動き、萬象は皆な親しんで此に之く。天を親しんで氣に之けば、則ち其の勢は輕を爲し、地を親しんで質に著けば、則ち其の勢は重を爲す。此を以て輕浮の勢勝れば、則ち重と雖も沈むこと能わず。重沈の勢勝れば、則ち輕と雖も浮くこと能わず。人造を以て之を言うに、彼の舟の如し。虚は以て輕浮の氣を盛る。輕浮を盛るを以て。而して重沈も之が爲に擧げらる。而して浮くを得る。故に、沈實の重は、其の輕に輪れば則ち沈まず。輕浮の勢は、其の重に輪れば則ち浮かず。是を以て輕浮重沈の勢は、もと胡越に非ざるなり。何となれば則ち今試みに氣中より繩を以て石を繋ぎて、而して諸を千仞の岸に下せば、重は下に援きて、而して力は復た擧ぐ可からず。又た試みに姑く身を水底に潜めて空器に氣を盛り、綸して諸を千尋の上へ上ぐれば、輕は上に引きて、而して力復た潜む可からず。蓋し、勢反し、力侷しく、事殊にして意同じ。

轉持なる者は動の天地を爲し、虚實なる者は靜の天地を爲す。體は形を得て成り、氣は性を得て成る。氣物は體なり。會易は性なり。體は物を爲せば則ち天地なり。性は物を爲せば則ち水火なり。天地は能く運轉噓噓す。

天に氣象有り。氣は動き象は靜なり。氣は則ち一東一西なり。西なる者は北を以て守り、東なる者は南を以て環

る。象は則ち一聚一散なり。聚まる者は明にして熱なり。散ずる者は暗にして寒なり。氣は能く東すと雖も、而

も東する者は象を主と爲す。象は能く西すと雖も、而も西する者は氣を主と爲す。若し西行を以て、象之に隨

うと爲さば、則ち何を以てか日月星辰は相い南北せん。若し東行を以て、専ら象の行と爲さば、則ち恒星は何を

以てか齋しく東西せん。然り而して日は轉じ影は移り、月は疾く星は遲きに由りて之を觀れば、則ち象中に緩

急有り。西する者は守り定まりて疾く、東する者は守り環りて遲きに由りて之を觀れば、則ち氣中も亦た緩急有

り。故に分ちて之を言え、則ち氣は西し象は東す。合して之を言え、則ち氣象は各おの東西す。蓋し西轉の

一周は則ち攸遠。西する者の軸は、北を爲して立なり。北する者の輪は、西を爲して横なり。其の中線の一規は、

即ち西中なり。東運の一周は則ち遠し。東する者の軸は、南を爲して立なり。南する者の輪は、東を爲して横な

り。其の中線の一規は、即ち東中なり。故に北軸は常に守り、南軸は常に環る。環る者は其の行遅く、守る者は

其の行疾し。且つ西する者は氣を轉じ、東する者は象を運す。象は東旋に由りて運すと雖も、亦た各自に行を爲

す。日なる者は、象の主なり。路は東中に縁る。故に參差の間、準を日行に於て取る。蓋し西する者を以て正と

爲れば、則ち東する者は斜なり。猶お舟の將に行かんとして、而して正しく風に對す可からずして、勢を避けて

斜に走るがごとし。蓋し天地の機は一動一止なり。動は外に在れば則ち東西す。内に在れば則ち噓噓す。東西と

噓噓と同じく氣なり。天の轉を爲す。東明なれば則ち西は暗なり。西明なれば則ち東は暗なり。故に一線東

行すれば則ち一線西行し、物は之に従いて一動一息す。地の持を爲し、南寒ければ則ち北は熱す。北寒ければ

ば則ち南は熱す。故に一邊の氣、噓すれば則ち一邊の氣、噓す。物は之に従いて一長一消す。故に地氣なる者は

燥なり。此に從いて升る。天質なる者は水なり。此に從いて降る。故に日影は東西の中に在りて東西す。水燥は上下の中に在りて上下す。上升下降、上面始めて轉じ、東運西轉、下面始めて持す。天の偏覆する無きは、西するを以てなり。日の偏照する無きは、東するを以てなり。故に氣に東西の轉有り。象に順逆の行有り。西轉は日をして逆行して以て年を成さしめ、東轉は日をして順行して以て歳を成さしむ。是に於て氣は東西南北すれば、則ち象は明暗寒熱す。明暗は東西を得て晝夜を成し、寒熱は南北を得て冬夏を成す。

華液は能く鬱發凝融す。

天地なる者は體物、處を得て居る。華液なる者は性物、天地を得て居る。是を以て大地は運轉噉喻有り。華液は鬱發凝融有り。其の事は同じ。鬱易は發して火を爲し、凝念は融けて水を爲す。天地なる者は長持の物。解結聚散は緯に於て成る。水火なる者は相換の物。解結聚散は經に於て成る。而して鬱する者は止り、發する者は動き、凝する者は收め、融する者は發す。

夫れ天なる者は圓にして端無く、地なる者は直にして端有り。直にして端有る者は長なり。體の天圓に有せらるるを以てなり。而して地は一小圓塊を爲す。圓にして端無き者は大なり。氣の地直に持せらるるを以てなり。而して轉は一平長線を爲す。圓にして端無し。運轉は行を中に分つ。運轉は唯一の圓線なり。一線は西轉し、一線は東運するは、圓の道なり。東して盡きず。西して窮まらざるは、直の道なり。長逝を以てして東運は盡きず。西轉は窮まらず。循環を以てして西轉し東運し、往復は輪を爲す。氣は運轉を爲す。物は順逆を爲す。故に西轉は逆象を得て日を爲す。東運は順象を得て歳を爲す。月と日と同じく物を爲す。是に於て象行は東西順逆し、月と緩急を爲す。日行は天の舊位に會するの頃を一歳と爲し、轉行は地の舊位に會するの頃を一轉と爲す。日は東して遅し、西に轉じて疾し。緩は疾中に在り。東する者は西す。東する者は天を周り、西する者は地を周る。故に日の周天は歳を爲す。周地は日を爲し、轉の數に非ざるなり。

直にして端有り。噓喩は氣を中に於て分つ。噓喩は唯一の直氣なり。半邊は内に喩い、半邊は外に噓く。直の道なり。噓は極まれば則ち喩い、喩は極まれば則ち噓く。圓の道なり。長逝を以てして、而して此に喩し、彼に噓す。循環を以てして南北は噓喩し、往復は幅を爲す。氣は噓喩を爲す。物は發收を爲す。故に氣噓は物發を得て夏を爲す。氣喩は物收を得て冬を爲す。日と地と同じく物を爲す。是に於て地氣は南北噓喩し、日と轉持を分つ。是を以て同じく是れ一日月、以て東行を爲し、以て西行を爲す。是を以て同じく是れ一日月、以て南煦を爲し、以て北煦を爲す。地質は止物なり。天象は動物なり。天行は地を周り、象行は天を周る。天行は象を回し、象は翻えつて地を周る。

日は西線を環つて一點を成し、一盈一縮を示す。而して一周天は其の中に在る。而して其の間は、星は東に移り、天は西に移る。月は月道を環つて一轉を成し、一遲一疾を示す。而して一周天は其の外に出づる。而して其の間は、日は東に往き、交西に後る。故に周天の會期は、各天の成紀に非ざるなり。

日月の天を周るを順行と爲し、地を周るを逆行と爲すは神爲なり。天の日に會すれば則ち一歲成り。日の地に會すれば則ち一日成るは、天成なり。是を以て日月の體は、會して朔成り、違いて望成る。運轉の線は、會して分成り、違いて至成る。

分なる者は春秋の中なり。至なる者は冬夏の端なり。混地二面にして、一面一背す。故に我の居る所を面と爲し、居らざる所を背と爲す。面する所は觀る可く、背する所は察す可し。故に面北の人は南を背にす。故に日は北すれば則ち夏なり。南すれば則ち冬なり。北向の衢に當れば則ち春なり。南向の衢に當れば則ち秋なり。面南の地は北を背にす。日は北すれば則ち冬なり。南すれば則ち夏なり。北向の衢に當れば則ち秋なり。南向の衢に當れば則ち春なり。故に混地の經用は、一邊は雪を降らせば、一邊は雷を發す。是を以て面背を分てば、則ち晝夜冬夏有り。混地を以てすれば則ち夏即冬なり。夜即晝なり。

是を以て會違交錯の狀は、日は天を周りて東し、西線を依違して西す。月は天を周りて東し、東線を依違して西す。月の東線を一周するを一章と曰う。日の西線を一周するを一紀と曰う。順逆の數う可き者成る。

地道は靜にして易わり、天道は動にして定まる。故に地物の往來は、亂れて變ず。大物の往來は、錯りて定す。

日月運轉の會違は、人、之を止地に驗して、而して其の紀を認む。口の一周地は、之を一百に刻す。日月一會、三十日に儉す。故に日一周天の頃は、天を爲して轉ぜらる。周地すること三百六十五にして贏る。月と相い會す

ること。一十二にして贏る。贏るを得て閏を立つ。故に口と曰い、月と曰い、歳と曰い、閏と曰うは、交錯の會

に成る者なり。若し芸芸の數を以て、實日月の紀なりと爲さば、則ち亦た焉んぞ神爲の運を知らん。夫れ天の數

能く無數を積むと雖も、而も亦た一なるのみ。故に奇偶は計を以て之を紀す。皆な人爲に出づ。成る者は、天な

り。成る者の天に出づるを知りて、而して爲す者の天に非ざるを知らず。人の數に眩むなり。運する者は唯だ運

す。各行は運轉し、引きて其の極を見ず。人は天行の神爲を觀んと欲す。故に彼の百刻二十九日。十二月。三百

六十五日等の數を置きて、而して各各の一轉、會否は其の間に成るを知る。此れ回りに復する者の常に始終を成

し、引きて行く者の竟に始終無き所なり。唯だ人は、得て此の塊塊を度る。得て此の衰衰を刻む。此の故に長逝

する者は紀す可き者無く、往復する者は以て數う可きなり。日月星辰は、各運遲疾を成す。一轉の間を觀るに歩

に緩急有り。各各一轉、其の時に違う無し。故に常に平行に歸す。歸すと雖も而も各各相い與せず。相い與せず

と雖も、而も計は日の轉に遇いて一周地するより肇まる。故に其の氣轉象運は、氣は一に象は各なり。日の頃、

計りて一百と爲さば、則ち轉の一周地は、則ち九十九刻の餘なり。口一百刻、月一百零三刻餘、是れ日月の逆行

なり。日の周天は、三萬六千五百二十三刻餘なり。月の周天は、二千七百三十二刻餘なり。是れ日月の順行なり。

月道の西して東線を一周すること六十八萬數百餘刻、順行一周すれば、則ち逆行六千五百七十七回餘、日道の西

して西線を一周すること凡そ若干億、順行一周すれば、則ち逆行の口は其の刻に應ずるなり。故に西する者を逆

行の日月と爲し、東する者を順行の日月と爲す。其の會違を説けば、則ち月は半周犬にして、而して日と望せず。更さらに百十刻餘を進めて朔さくと爲す。一周天にして、而して日に及ばず。又た二百二十刻餘を進めて朔を爲す。日は三百六十五周にして、而して轉は三百六十六周なり。蓋し天道は常に成る。故に其の會は差わず。人は之を計るを得る。地道は變を爲す。故に會否は常無し。之を計る可からず。故に曆紀を以て之を計れば、則ち日の地を一周す、之を一日と爲す。日の月を一周す、之を一月と爲す。日の天を一周す、之を一歳と爲す。日は月に十二會す。之を一年と爲す。年なる者は、歳の餘を得て閏を置く。之を循環の間に均しくして、寒暑を差わざらしむる者なり。是の故に天を以て之を言えは、轉ずる者は西轉一始終して、而して復た相積む。曆の紀する所の日は、則ち其の逆行の地の舊位に復するの期なり。而して月の逆行は則ち標せず。一歳は則ち其の順行して天の舊点に復するの期なり。而して月の順行は則ち日の合を數う。故に一月の紀なる者は、日に及ぶの時なり。而して月の自行は遅疾に見わる。遅疾は一月の紀に及ばず。一歳の紀なる者は、日の舊点に復するの時なり、而して日の自行は、盈縮に於て見る。盈縮は還りて一歳の經を過ぐ。故に今の曆は、日月の會期を紀して、其の周紀を謂うに非ず。故に月は常に明魄を半にし、朔望は地より望むに成る。日月は各一周、閏餘は則ち會を以て紀するに成る。是を以て地なる者は一圓塊。長線に繋りて止まる。天は地と反し、日は地と比す。故に日の逆行する者は、東西に由り、晝夜の成る所、群動の動息は之に率ゆ。順行する者は南北に由る。冬夏の成る所、萬物の發收は之と與にす。烟起り氣溼り、雷發し雪結び、鳥獸の飜革し、艸木の榮枯するは、物の發收に従うなり。風狂い雨旋り、地震え天鳴るは、物の鬱發を爲すなり。

華なる者は一氣の英華なり。液なる者は大物の滋液なり。液無ければ則ち體成らず。華無ければ則ち氣見れず。是を以て華なる者は易氣の發する所なり。液なる者は含體の融する所なり。是を以て天地轉持と、水燥日影とは、性體相い合す。天地轉持は物を開き、日影水燥は氣を交える。小物は以て其の間に生化す。是を以て大小の物は、同

じく聚散解結す。聚散解結は、緯に露すれば則ち靜なり。經に露すれば則ち動なり。氣聚り質結んで物能く生ず。氣散じ質解けて物能く化す。生化は何爲れぞ廻ち一動一植せん。是れ之を小物と爲す。

大は小を容れ、常は變を容る。小なる者は鹿なり。往來して體を換える。大なる者は精なり。生化して體を一に

す。鹿を以て精を徴し、常を以て變を察す。此れ猶お彼れのごとし。彼れ猶お此れのごとし。是を以て散結して

常を持する者は、生化の端を没す。散結して體を換える者は、生化の端を露す。是を以て金石は攸久に成壞し、

雲雨は條忽に聚散す。皆な道を異にして而して居は同じ。

動なる者は有意なり。植なる者は無意なり。有意なれば則ち能く動なり。無意なれば則ち能く靜なり。而して動は

能く作止し、植は能く榮枯す。故に其の之に成る在るや、氣は聚散し、物は解結す。其の之に成る在るや、動は作

止し、植は榮枯す。作止の變に至りては。則ち剖くに隨いて體各性を具す。體性は愈いよ分れて、而して態は

愈いよ同じからざるなり。是を以て植は靜を以て形體の變を極め、動は動を以て動作の變を極む。

天行は持に於て止り、地行は轉に於て止る。氣轉象運は圓を以て行き、雲騰雨墜は直を以て行く。水は斜に流れ、

潮は斜に遡る。鳥は氣を御し、魚は水に遊ぶ。獸は地を走り、龜は水に泳ぐ。蚤は能く跳び、虱は能く跛う。蟹

は横行し、蝦は卻飛す。人は立行し、螺は倒行す。蛛は絲を走り、鼯は土を穿つ。水母は唯だ浮き、海參は唯だ

轉ず。蜈蚣は多足を得て行き、反鼻は無足を以て行く。獸は四脚にして行き、人は雙脚にして歩く。行の變を極

むるなり。日月は轉に居り、雲烟は持に居る。植は土に居し、動は氣に居す。魚龍は水に居し、藻苔は石に居す。

獸は伏し人は臥す。鳥は枝を掴み、蛾は壁に點す。鳧鷖は能く浮び、魚鼈は能く潜む。物は正しく處して、伏翼

倒懸す。物は夜休みて、鷓鴣は晝睡る。止の變を極むるなり。故に生生の跡は、金石は自から凝し、變化の由る

所を隠す。螺蛤は交わらず。感應の跡する所を没す。華實は已に見る。牝牡最も著るし。跡に就き其の變を極む

るに、動に牝牡有り。植は華實有り。動は卵胎を分ち、植は子根を分つ。而して動植に氣化有り。體化有り。是

を以て、植は或いは實を結び、或いは子無し。或いは瓢を肉中に生じ、或いは實を皮中に成す。或いは根より生じ、或いは華より結ぶ。麻は華と子を分ち、紫檀は葉と子と一にす。水物の薄感。羽族の薄交。魚は一胎數萬。人は數交一孕なり。鳥は能く卵に伏し、魚は卵に伏せず。蠟螂は子を蝶蛸に結び、蜘蛛は兒を囊中に畜う。細に之を觀れば則ち或いは子を抱く者有り。或いは卵を負う者有り。

是を以て、其の行止する所、天に在るの氣象は、則ち東西南北し、地に在るの氣質は、則ち噓喻發收す。然り而して萬物に至りては、則ち或いは正順、或いは乖忤、或いは滑通、或いは澀蹇、是を以て人は、死生老少は經動し、營爲言施は緯動す。徳は善惡を分ち、道は邪正を分つ。